

『世迷言』

『世迷言』 作・中屋敷法仁

【登場人物】

姫 ヒメ
翁 オキナ
婆 オウナ
帝 ミカド
妹 イモウト
院 イン
使 ツカイ
民 タミ
男 オトコ
兵 ツワモノ
師 シ
猿 サル
医 クスシ
鬼 オニ
倅 セガレ
天 テン

【〇〇】

院 彼方の月より 此方を見れば、

山も谷も、森も無く

人も猿も、鬼も無い。

ただ、ただ、この世があるばかり。

ただ、ただ、この世があるばかり。

我らは、命ひとつによって

この世に留めおかれる運命。

やがて去る。

やがては去りゆく、儂き浮世。

ただ、ただ、去る日を待つばかり。

ただ、ただ、その日を待つばかり。

帝 父上。父上。

妹 寝所にお戻り下され。

帝 病重く、御身体も弱り、勇ましい心を失っておられる。

妹 今際の際に、月を眺め、世を儂んでおられる。

帝 父上。そのご気鬱が、いくらか和らぐやと思ひ、

まじない師を連れてまいりました。

妹 庶民の間で大評判。「猿芸」でございます。

帝 魔が去る、厄去る、病去る。

災い去る去る、猿の舞。

その舞を目にした者からは、

病魔、災厄、それら一切が消え去るのだとか。

妹 参れ。

帝 参れ。

帝妹 参りて、舞い入れ。

使 大きな鼓を担いだ、一人の男がやってきた。

使 相勤めまず舞い方は、靈験あらたかな「かの靈山」にて
生まれ育った猿の一族。
いざ、舞いましょう。舞いましょう。

妹 父上…父上…。

帝 これは…如何なこと…。

使 舞を眺めたまま、こと切れておる。

帝。さては、御父君は「かの靈山」にて、

伐木殺生の禁戒を犯したことがあるのでは。

…いかにも。

妹 お兄様。

帝 いかにも。我らの父君は、

かの靈山にて執り行われし、追善仏事の道すがら、

鷹を放ちては猿を生け捕り、

ご愛用の小刀、ずわと抜き、

猿の喉笛かき切るお戯れ、

しばしば興じることあつた。

使 今宵の舞い方は皆一同、

戯れに殺められし猿どもと、縁ある者ばかり。

しかして、弥栄（いやさか）を願う祝いの舞は、

呪いの舞へと様変わり。

御父君の罪、咎、穢れ。

御自らの命をもって、贖われたのでございましょう。

帝 去れ。去れ。

使 まさか帝。このような始末に至ること、

見越した上で、猿どもをお召しになったのか。

帝 去れ。去れ。

使 猿使いは風のように姿を消した。

帝 帝の父君が、猿に殺されたとあっては一大事。
このことは内々に「無い無い」と始末しよう。

使 その猿使いの行方は、誰も知らない。

【01】

翁 誰か。誰か。

使 今は昔の、こと。

翁 誰か。誰か。

使 転がるように山から下りてきた、年老いた一人の翁。

翁 乳の出る女はおらんか。

翁 乳の出る女はおらんか。

翁 この「ややこ」に、乳を飲ませてやってくれ。

民 翁どの。翁どの。その、ややこはどうしたのじゃ。

翁 拾ったのじゃ。

民 拾った、とな？

翁 山の中から、竹の中から、

民 山の中の、竹の中から、

翁 拾って来たのじゃ。

民 こと細やかに

翁 申せや、申せ。

翁 申す申す。もそもそ申す。

民 そそもそ。

翁 いつもものように、山に入り、

翁 竹を切る切る、野良仕事。

民 竹を切る切る野良仕事。

翁

ふと顔をあげれば一本の、
まばゆく光る大きな竹が、
目の前に伸びておったのじゃ。

民

光る竹、とな。

翁

恐ろしい、恐ろしいとは思ったが、
見れば見るほど立派な竹。

竹取ってなんぼのこの翁、かように立派な竹を目にし、
張り切らんでなんとする。竹切らんでなんとする。

えい、やあ、えいと、切ったところ。

中から、このややこが現れたのじゃ。

民

竹から生まれたややこ、とな。

翁

泣いてばかりじゃ、ええん、ええん。乳が飲みたいに違いない。
乳の出る女はおらんか。乳の出る女はおらんか。

ちなみに女の子です。

民

男か女かなど、どうでもよい。なんと気味の悪い話よ。
如何なるよすが、えにしによって現れたかは判らんが。

竹から生まれたという話、まっことならば、そのややこ、
人にあらざる者ではないか。

人間（じんかん）に人外（じんがい）交わるは災いの元。

捨てよ。捨てよ。殺せ、殺せ。捨てよ。捨てよ。殺せ、殺せ。

天

ややこに乳を飲ませる者はいなかった。

ええん、ええんと泣きじゃくる、小さなややこの口塞ぎ、

なんとか家まで帰り着く。

婆

ややこですって

天

家には長年連れ添った女房、婆（おうな）が一人。

婆

竹から生まれた、ややこですって

天

ややこは、女の股より生まれ出する者。

婆

竹から生まれたというならば、

天

人ならざる者に違いない。

婆 可哀想じゃが、
天 捨てましょう。
婆 捨てましょう。

天 交われど、交われど、
婆 子に恵まれず幾十年。
天 年老い、月のものも無く、
婆 もはや、ややこなど作れぬ我が身。
天 母の幸せを知らぬまま、
婆 やがて去りゆく
天 我が命。

婆 この子は、天がお与えくださったのじゃ。

天 がわしの姿を憐み、

婆 このややこを光る竹に宿したのじゃ。

天 からいただいた尊き命。

婆 育てましょう。育てましょう。

天 育てましょう。にも、乳は無い。

婆 無いのなら、この身より絞り出すまでのこと。

天 婆の心に湧き上がる母の情。

婆 年老い、枯れ果てた乳房より、

天 おお。乳じゃ。乳が出た。

婆 さあ飲め飲め。たあんと飲め。

天 村人たちの白い目もなんのその。

婆 なんのその。

天 翁と婆は必死に働き、愛情たっぷり、ややこを育てた。

婆 すすくと、竹のようにすすくと育ち、

天 やがてややこは娘となった。

婆 美しい。

天 美しい。

婆 姫じゃ。

天 姫じゃ。
婆 竹から生まれた姫じゃ。

【02】

婆 どうしたのじゃ。何故隠れる。
姫 おばあさん。私は、怖いのです。
婆 怖い？
姫 我と我が身が恐ろしいのです。
婆 恐ろしい？
姫 私は、竹から生まれた人外。
婆 人里に住むべき者では、ありません。
 たしかにお前は竹から生まれた。が、が、
 わしの乳を飲み、ここまで育つたのじゃ。
 わしの娘には変わりない。
 人じゃ、人じゃ。
 人の娘として、胸を張って生きなさい。

姫 人であるものか。
天 皆は私の姿を見て、
姫 姫じゃ、姫じゃと褒め立てるが、
天 竹から生まれた娘など、
姫 古今東西、類がない。
天 私は何者なのだろう。どうして
天 女の股ではなく、
姫 光る竹から生まれたのだろう。

天 まん、まん、満月。
 じっと月を見ていた。
姫 じっと月を見ていた。

天 月を見ていた体から、

姫 血が。

天 血が。

姫 血が。

天 股の間より、さらりさらさら、真っ赤な血。

姫 おばあさん。助けてください。

血が、止まりません。

婆 怖がることは無い。これこそ、まさしく、女の証。

天 女の証。

婆 やはりお前は人じゃ。女じゃ。姫じゃ。

天 婆に体を清められ、姫は安らかに床につく。

婆 ねんねん、ころりよ。おころりよ。

姫 ぐーぐー。

翁 見事なり、婆の子守唄。

天 しかし、朝になり、婆がその顔を見ると、見やると、

姫の顔はさらに固く、強張っていたという。

【30】

男 姫を妻に欲しい。

嫁に欲しい。

娘に欲しい

婆 姫の美しさは遍く天下に知れ渡り、

男 翁どの、婆どの。翁どの、婆どの。

姫に会わせてください。会わせてください。

婆

娘よ、姫よ。
お前を欲しいという男ども、
あちらこちらより現れて、
家の前に群れをなしておる。
身分、家柄、卑しからぬ方々ばかり。
どこぞの家に嫁ぎ、
女としての幸せ、妻としての幸せ、
母としての幸せを手に入れよ。

姫

幸せ。

そんなもの私には、縁のないものでございます。

私のような者を家に入れては、

大きな災いの種となりましょう。

どういふことじゃ。災いの種とは。

災いとなっても構わぬ。構わぬ。

この身が減びようと、家が傾こうと、

姫が欲しい。姫が欲しい。どうしても

と言ふのなら、頼みがございます。

頼みとな。お安いご用さ。何でも言ってくれ。

「鬼の首」を取ってきてください。

鬼の首、じゃと？

それを成し遂げた方の元へ嫁ぎます。

娘よ、姫よ。どうしてもどうして、どうしても鬼の首など欲しがらる。

私は、鬼に狙われている身。

鬼に狙われている、じゃと？

姫

血が出た夜、私の体に、月のものが来た夜でございます。

天

まん、まん、満月。

姫

おばあさんに体を清められ、安らかに床についてからも

私は再び目を覚まし、月明かりを頼りに、
家の周りを歩いておりました。

婆 血。血。この血が女の証、人の証なのじゃ。

姫 そうとは思えぬ。

天 赤い血ならば、獣や鳥も流すではないか。

姫 私が知りたいのは、

天 この赤い血が、

姫 何処から来たのかということじゃ。

天 竹を切っても、雪のように白いではないか。

姫 赤いものなど流れはしない。

姫 私の体は、

天 この血は、

姫 一体、どこから。

天 まん、まん、満月。

姫 じつと月を見ていた。

姫 そこへ突如、現れ出でたるは、一匹の鬼。

天 生娘の、血の臭いに、誘われたのだろうか。

姫 私はその場から逃げ出すこともできず、

ただただ震えておりました。

天 鬼は、股からさらりさらりさらさら流れ出る真っ赤な血の臭いを嗅ぐと、
静かに微笑み、何処かへ消え去りました。

姫 私は床に逃げ帰り、布団をかぶりがたがたと、

朝が来るのを待っていました

天 が、やがてまどろみ、夢の中。

姫 本当に恐ろしいのはここから、

天 その鬼は夢の中にも現れたのです。

私の血の臭いを覚えた鬼は、私の夢に入る術を覚えたのでしよう。

姫 その夜以来、鬼は毎晩、夢に現れ、私の姿をじっと見つめているのです。

天 それだけではありません。

姫 一歩、さらに一歩と、夜毎、少しずつ私の方に、近づいているのです。

天 昨夜はついに、私の目の前に立ち、私の腕をがっしりと握っております。

姫 このままでは、あと幾夜かで鬼の手は、腕から肘、肘から肩へと移りに移り、果ては私の首にかかり、締め殺してしまうでしょう。

翁 ああ。恐ろしい。

翁 しかし姫。それは夢だろう。

姫 夢の中でも「あ、死んだ」と私が信じれば

翁 「あ、死んだ」と心も死んでしまうはず。そうなりや…うっ。

翁 あ、死んだ。

姫 となりましょう。不安で夜も寝られません。が、うっかり寝てしまいます。

男 と、やっぱり鬼が現れます。

男 助けてください。鬼から私を救ってください。よーし、わかった。ならば鬼退治に行こう。

男 鬼の首を討ち取ろう。

婆 その鬼とやらは何処にいるのじゃ？

男 棲家が分からねば行こうにも行かれぬ。

婆 今夜、夢に現れた時に棲家を尋ねよ。

姫 鬼に物を尋ねるなど、恐ろしくてできません。

婆 しかし、やらねば鬼は退治できません。

姫 しかし、できません。

婆 ねんねん、ころりよ。おころりよ。

姫 ぐーぐー。

翁 見事なり、婆の子守唄。

姫 これはいつもの夢の中。ああ、鬼が見ている。こちらを見ている。
あの…あなたはどちらから私の元へ、
訪ねてこられるのでしょうか？

鬼 あの山超えて、谷越えて、
鬼 あの山超えて、谷越えて、
姫 さらに奥深くの、森。
森。

男 行くぞ、行くぞ。行くぞ。行くぞ。
天 か弱き姫を守るため、命をかけた鬼退治。
しかし、誰ひとり、生きて帰ってはこなかった。

姫 助けてください。助けてください。
鬼がそこまでやってきております。
昨夜はついに私の肩に、肩に手をまわしてきました。
殺されます。締め殺されます。

【04】

妹 うーろーたーえーるーなーっ。
翁 何者じゃ。
妹 みーかーどーじゃーっ。
翁 み、みかどっ…ははーっ。
妹 こちらのお方は時の帝。名前は…あえて言いますまい。
帝 世の男どもを虜にし、鬼退治に赴かせ、
無駄死に犬死にさせている不屈き千万な姫。
が、いると聞いたが、
妹 おーまーえーかーっ。
姫 はい。私です。

兵 首一つ。

帝 あの山超えて、

兵 谷越えて、

帝 さあ、行け。やれ、行け。

兵 どんと行け。

天 しかし、誰ひとり、生きて帰ってはこなかった。

妹 お、お兄様…。

帝 ぐ、ぐ、軍師を呼べーっ。

【05】

師 鬼は人を喰らう生き物。

人の臭いを嗅ぎ分け、人の心を読みとることができ申す。

頭数をいくら揃えようと到底、

人の力では太刀打ちできません。

では、どうしたらよいのじゃ。

帝 鬼退治には、人ならざる者の力を借りねばなりません。

師 人ならざる者とは。

帝 人ならざる、猿でございます。

師 さる？

師 鬼の棲むというあの森には、

古より大猿の一族が群れをなしております。

森の中の戦であれば、

木に登り、草に潜む猿どもの得意とするところ。

かの者たちの力を借りれば、帝、

勝機はあるかと思われませぬ。

帝 戯言を申すな。

余は人の長たる帝じゃぞ。
猿の手など借りられるものか。

帝 …とは、言ったものの、

師 鬼を退治する他の手だてが、
まるで、まるで、まるで思いつかない。
帝は共を一人だけ連れ、森の奥へとやってきた。

【109】

師 暗闇の中でひとつの影が、
鬼にやられたであろう武士（もののふ）の骸を弄んでいる。

帝 あれは…人ならざる、猿じゃな。
猿 キーキッキッキ。

帝 なんじゃ、お前たちも鬼に食われに来たのか。

帝 猿が、人の言葉を操るとは。

猿 勉強しました。

帝 ごいすー。

猿 その面構えには覚えがある。人の長たる帝だな。

帝 猿の分際で、何故、余の顔を覚え知る。

猿 かつて院の御前で、舞を舞ったことがある。

帝 あの時の、舞方の一匹か。

猿 今はこの森を治める大猿の皇子じゃ。

帝 大猿の皇子よ。我らはこの森に棲むという、

鬼を退治しようと思うておる。

猿 よく知っている。お前らが鬼に食われるのをずっと見ておった。

帝 鬼退治には我ら人の力ではまずまず不可能。

猿 そりゃそうだ。

帝　　そこでだ。お前たち、大猿の一族の力を貸してもらいたい。

共に行こうぞ、鬼退治。

猿　　鬼退治。

我ら大猿のこの力、貸せない事は無いのだが、

人食らう鬼に恨みは無い。見返りがなくては、猿は動かぬ。

もちろん褒美はたとと取らせる。ほら、バナナ。

帝　　いらん。

猿　　ごめん。

猿よ、何が欲しい。余は帝じゃ。

鬼の首を討ちとれるなら、褒美に何でもとらせてやろう。

猿　　言ったな、帝。

帝　　言った、言った。

猿　　我ら大猿、喉からこの手が伸びるほど、欲しいものがある。

帝　　言うてみよ。

猿　　人の、血だ。

帝　　人の血。

猿　　我らの中に、人の血を混ぜたいのだ。

帝　　人の血を混ぜる。

猿　　猿同士でつがえども、つがえども、

猿から生まれるは猿ばかり。

これではいつまでもウツキッキーから進歩せぬ。

猿として人に虐げられる運命。

このままではいかん。

我らの体に、人の血を混ぜるのじゃ。

人の血が混ざれば我ら大猿、

人の知恵、力を手に入れて、一族の繁栄、間違いなし。

帝　　人と、交わろうというのだな。

猿　　ただの人ではいかんぞ。何事にも秀でた者でなければいかん。

さて、何事にも秀でた者、とは、誰ぞや。

帝　　余じゃな。帝じゃな。

猿 人の長たる帝よ。

何事にも秀でたお前の子種、雌猿どもに植え付けよ。

帝 お腰につけたその団子、一つ我らにくださいな。キツキツキ。戯言を申すな。余は帝じゃぞ。帝の子種は、すなわち神の種。

畜生風情にくれてやるわけにはいかん。

猿 ならば、お前の妹じゃ。

帝 妹。

猿 噂に聞けばお前の妹、

たいそう健やかで、

たいそう賢く、

美しく育っているそうだな。

その妹、俺の妻として迎えたい。

俺の子を生んでもらいたい。

そうしてくれりゃあ鬼の首、三日以内に討ち取ってやろう。

キーキツキツキ。

帝 竹から生まれたあの姫を

妻にするには、鬼の首。

鬼の首を手に入れるには、

余の妹をあの猿に

くれてやらねばならぬのか。

【〇七】

帝 なーんてことが、あったのさ。

妹 おーぞーまーしいーっ。

供 おぞましい。

妹 おぞましくも、いーまーいーまーしいーっ。

供 忌々しい。

妹 私たちから父上を奪ったのは猿どもの呪い。

帝 そんな猿どもが、私たちの血を、私の体を欲しがっているだなんて。安心しろ。

妹 お前は、帝である余の妹だ。
いやん。

帝 やんごとなき一族の女だ。

妹 いやんいやん。

帝 猿の元に嫁ぐ。

妹 そんなことは、させないさせない、するわきゃない。

帝 お兄様…。

妹 お前は…流行り病で死んだことにしよう。

帝 え。

妹 人の世を捨て、猿の妻となれ。

帝 お兄様。

妹 竹の姫が欲しいのじゃ。竹の姫が欲しいのじゃ。

帝 血の繋がった、たった一人の妹を捨ててまで、ですか。

妹 はい。そうです。やりたいのです。

帝 血も涙も無いお方。

妹 何を言っている妹よ。

帝 血も涙もあるのだよ。

妹 血も涙もある生き物なのだよ。

帝 であるが故に、よい女を欲するのじゃ。

妹 その為には手段など選ばぬのじゃ。

帝 恋い慕う、兄の役に立つ妹の喜び、かみしめよ。

妹 …。

帝 嫁入り道具、というには余りにも粗末だが、この小刀をやろう。

妹 小刀…。

帝 父の形見、馬手差（めてぎし）の小刀。

妹 猿を殺めし咎により、命尽きる因果となった小刀じゃ。

帝 猿の妻としての暮らし向き、辛くなったらその小刀で、

妹 胸をひと突き、この世とおさらばするのじゃぞ。

帝 ただし、鬼の首をとるまでは我慢してくれよ。

鬼の首さえ取ったなら、あとはお前ひとりの命、
死ぬも生きるも好きにするがよい。

師 帝の妹君が流行り病で御隠れになったという
が、その亡骸を見たものはいない。

妹 お兄様に捨てられた。
天 竹の姫への情欲に、
妹 狂った兄に捨てられた。
天 女の操を、
妹 猿に、
天 あろうことか、猿に
妹 捧げることになろうとは。

【08】

猿 女。人の女。
妹 …。
猿 俺は猿の皇子だ。
妹 …。
猿 俺たち大猿と違い、頭が良さそうだ。体も丈夫そうだ。
妹 …。
猿 今からお前には、俺の子を生んでもらう。
安心しろ。
交わり方なら、手取り足取り、しっぽ取り、俺が教えてやる。
キーキッキッキ。

妹 こんな命に、
天 こんな世に、
妹 なんの未練があるものか。

天

小刀を抜き、首に押し当てる。

妹

ああああああああああああああ。

天

これより先は、

妹

刺せぬ。

天

刺せぬ。

妹

痛い。

天

痛い。

妹

魂の志を

天

命の理が妨げる。

猿

小刀で自らを傷つけるとは…。

妹

不満があるなら口で言え、辛い事なら分かち合おう。

猿

俺は、お前の夫だぞ。

妹

夫…。

猿

ああ、血だ血だ、人の血だ。

妹

勿体無い。勿体無い。

天

猿の皇子は、私の血を綺麗に綺麗に、舐めあげてくれた。

妹

傷口はすぐにふさがり、血は流れ落ちるのを止めた。

天

兄に捨てられ

妹

猿に嫁いでも、

天

私の命は尚、

妹

生きることを望んでいる。

天

のか。

猿

俺とお前は子を作らねばならぬ。のだが、何も急ぐことはない。

妹

お前が猿の暮らしに慣れ、俺のことを知り、俺に惚れ、

天

その後でも全く構わない。

妹

先は長いのだ。ゆっくりやろう。

天

それは無用なお気遣い。私はもう、その気になりました。

天 子を作りました。
妹 子を作りました。
天 子を作りました。
妹 私はもはや人ではありません。
天 あなたの妻です。
妹 猿の元へ嫁いだ以上は、猿です。
猿 環境適応能力が、めっちゃ高い。
妹 それこそ、女の取り柄でございます。
猿 私を抱いてください。
妹 嬉しいぞ。嬉しいぞ。では早速、交わろう。
猿 明かりを消して。
妹 ふーっ。
猿 教えてください。手取り足取り、しっぽ取り。
妹 猿の皇子と、
猿 帝の妹が、遂に、まーじーわーるうーっ。
猿 ……駄目だ。
妹 駄目？
猿 抱けない。
妹 抱けない？
猿 やっぱりお前は人だよ。やっぱり俺は猿だよ。
妹 猿としての本能が、人であるお前を抱くのを拒む。
猿 私は、猿です。
妹 いやいや、人だよー。無理だよー。
猿 ウッキー。
妹 無理だよー。そんなんじゃだめだよー。
猿 魂の志を…命の理が妨げる。
妹 どうしたらよいのでしょうか。
猿 待って待て。今、猿知恵を働かせる。
妹 そうだっ。あの方をお呼びしよう。
妹 あの方？

猿 先生。先生。

使 大きな鼓を担いだ、一人の男がやってきた。

猿 こちらの御仁は我ら猿に芸を教えることを生業とするお方。

猿 俺に人の言葉を教えたのもこちらの方だ。

妹 はあ…。

猿 この方の手にかかれば、猿もまるで人のように

妹 舞を舞ったり琴を奏したり酒を注いだりできるようになる。

妹 それがどうかしたんですか？

猿 人に人の真似をさせることができるなら、その逆、

妹 人に猿の真似をさせることも容易いだろう。

妹 ということで、先生。この女を、俺が抱きたくなるような

使 俺好みの「雌猿」にしてくれ。

妹 容易いことでございます。では、とりあえず、尻を赤くしましょう。

使 え。

妹 お猿さんは、雌の真つ赤な尻を見て、交わる気分が高まるもの。

妹 まずはこの女の尻に、真つ赤な紅を塗りたくりましょう。

妹 ま、待つてください。殿方に尻を見られるなんて…。

猿 年がら年中、真つ赤な尻を天下に晒す。それこそが猿だ。

使 お前も猿に嫁いだ以上、いつまでも白い尻でいられると思うな。

妹 さあ、尻を出せーっ。

妹 お願いまーすっ。

使 ペロリン。

妹 ありがとうございますっ。

使 さあさあ、さあさあ、さあさあさあ。

妹 いざ、舞いましょう。舞いましょう。

妹 この鼓の拍子に合わせ、猿の舞です、猿踊り。

妹 人であることを忘れ去り、猿として踊り狂うのです。

妹 これは、この舞は…父上との最期の思い出。

使 人であることを忘れ去り、猿として踊り狂うのです。

妹 私は、私の命を求める者に従うのみ。

私は、猿だあーっ。

猿 猿じゃ。お前は猿じゃ。抱かせてくれ。抱かせてくれ。

使 その交わりは三日三晩、続いたという。

【09】

天 まん、まん、満月。

猿 今宵は満月。

妹 キー。

猿 満月の夜は鬼の鼻がよおく利く。

千里先の人の臭いも嗅ぎ分ける。

妹 キー。

ということ、鬼退治に出陣だっ。

帝 ということで、の意味がわからん。

猿 わからんか。

人の臭いに鋭くなれば、猿の臭いに鈍くなる。

帝よ。今宵は出来る限り、多くの武士を森によこせ。

人の臭いで、猿の臭いを誤魔化して、

隙を見つけて

鬼の首を切り落とす。

帝 出陣じゃー。

猿 …妹の事は、心配するな。

帝 妹？

大きなお尻も真っ赤。息災にくらしておる。

帝 妹？
猿 お前の、妹だ。
帝 何を言っておる。
余の妹は流行り病で、とうの昔に、この世を去った。

【10】

妹 御武運を祈っております。
猿 口に出さずとも、祈っておるのは顔でわかる。
妹 キー。
猿 なるほど…。そうか。キッキッキ。
妹 え。
猿 俺の子ができたようだな。
妹 うそ…うそーっ。
猿 ちなみに、男の子です。
妹 ええーっ。なんでわかるのおーっ。
猿 猿の勤だ。勤だが、外れたことはない。
妹 礼を言わねばならぬ。
妹 交われど、交われど、どれだけたくさん交われど、
妹 女が欲しいと望まねば、子はできぬ。らしいでな。
妹 これは…私が望んだ命…。
猿 倅よ。すすく育つがよい。
妹 今宵は鬼との大戦。この父は、命を落とすだろう。
妹 まさか、あなた…初めから、死ぬお覚悟で。
妹 この命ひとつで、美しい妻と、倅を得たなら儲けもの。
妹 ややこをなしたら、雄の役目もここまでじゃ。
妹 倅よ。お前は、人の血をひいておる。
妹 母の乳飲み、すすく育て。
妹 栄えよ。栄え続けよ。
妹 命を落とすだろうなどと…

そのような弱音、皇子の言葉とも思えませぬ。
鬼の首、見事討ち取り、生きて帰ってくるのです。
雄の役目は終わりましたが、父の役目はまだまだこれから。
乳があっても、父がなくては、乳があっても、父がなくては、
誰がこの子に男の生き様を教えるのです。
死に様ではなく生き様を。死に様ではなく生き様を。
鬼の首を討ち取るという、兄との命の駆け引きで
私を手に入れたあなたの生き様、どうか、どうか…。

【11】

帝 鬼が現れたぞ。さあさあ者ども、引きつけよ。

鬼さんこちら、手のなる方へ。

兵 鬼さんこちら、手のなる方へ。

猿 猿の皇子と

妹 帝の妹。命の理、乗り越えて、

猿 魂の志ひとつ

妹 新たに生まれた、この命。この子の為にも

猿 倅の為にも、

妹 どうか御無事で。どうか御無事で。

猿 キイイイイイ。

兵 あれは、あれは、あれは。

鬼の背面より、忍びよる大猿一族の精鋭部隊。

皇子のかかれの合図とともに、鬼の背中にとびかかり、
首の後ろを一刀斬り。

猿 妻の祈りが通じたか…。

鬼の首をとったぞおおおお。

帝 やったー。者ども、かちどきをあげよ。
兵 えいえいおう。えいえいおう。

鬼 猿の皇子よ。
帝 わあ。

猿 鬼の首が、語りだした。
鬼 見事な太刀さばき。

大いに感服いたしました。
しかし、どうして、何故あつて
私の首を落としたのです。

猿 許せ。鬼の首欲する、帝の助太刀。
鬼 帝よ。

帝 あ、はい。
鬼 どうして、何故あつて、私の首を欲したのです。

帝 世にも美しいあの姫を余の妃にしたいと思ったのじゃ。
鬼 姫。

帝 竹から生まれた姫じゃ。
鬼 竹から生まれた姫。

帝 知らぬとは言わさぬ。やいやい、鬼め。
夜毎、姫の夢の中に現れ出でては、

首に手をかけ、絞め殺そうとしていたな。
鬼 締め殺す。

帝 姫の心を案じ、身を案じ、お前を退治してくれたのだ。

【12】

天 まん、まん、満月。
姫 今宵も、夢を見ました。

天 夢の中に現れた、
姫 鬼は私の首掴み、
天 私を絞め殺す、
姫 ことはせず、
天 私の頭をそつと、
天 その胸に抱きしめたのです。
天 私の唇を、その乳房に押し当てたのです。
姫 私は、夢の中で私は、
天 鬼の乳房に吸いついておりました。
天 あふれ出る乳の温かいことといったら。
姫 美味しいことといったら。
天 目を覚ますと、私の股からは、
天 また、また
天 血が流れ出しておりました。
姫 夢の中に現れ出でて、私に乳を飲ませてくれた
天 あなたは、一体、何者なのでしょう。
天 私は、どこから生まれてきたのでしょうか。
婆 あなたは、まばゆく光る竹の中から生まれてきたはず。
天 そうでしょう、あなた、あなた。
翁 いつものように山に入り、竹を切る切る野良仕事。
姫 竹を切る切る野良仕事。
翁 ふと、
姫 ふと、
翁 顔をあげれば一匹の、
姫 の、
翁 大きな鬼が立っていたのじゃ。

翁 後生でございます。どうか、どうか、命だけはお助けください。

鬼 あなたは、何者ですか。

翁 わしは竹取の翁と申します。

鬼 竹を取るしか能の無い、ただの年寄りでございます。

翁 あなた…お独りですか？

鬼 年老いた女房が一人おりますが…。

翁 殺しはしません。あなたに、頼みがあります。

鬼 は、はい。わしにできることならば。

翁 できることです。私を抱いてください。

翁 え。

鬼 私にあなたの子種を宿してください。

翁 おっしゃっている意味がわかりませんが…。

鬼 私に、あなたの子供を生まれせろ、と言っているのです。

翁 鬼は、一本の竹に手をかざしたのじゃ。

鬼 その竹はまばゆく光り出し…。

翁 この光る竹が、私とあなたの逢瀬の場。

鬼 これより毎日、竹を取りに山に入ったら、

必ずここに立ち寄りなさい。

翁 そしてこの竹の傍らで、私を抱きなさい。

鬼 もし、来なければ、あなたの女房を殺します。

翁 そんな…。どうか、どうか、あいつの命だけは…。

鬼 ならば、私を抱きなさい。

翁 あなた。

翁 どうしてこんなことに。

翁 御仏の法に従い、何の罪も犯したことの無いこのわしが、

どうして外道と交わる羽目になる。

婆 あなたあああああああ。

翁 女房の命を守る為、わしは、鬼と交わった。
雨の日も、雪の日も、光る竹の傍らで、鬼を抱いた。
全ては、お前を守る為じゃ。

天 竹から生まれた、ややこですって
婆 そんな見え透いたつくりごと、勘づかぬ女房とお思いか。
天 この子は、あなたが竹林の中で、
どこそこの女とこしらえた子なのでしょう。

婆 悔しい。
天 悔しいと思いつながら、
婆 しかし…ややこ…。

天 ええん、ええんと泣きじゃくる、小さなややこを前にして
婆 この世ではとうに諦めていた 母としての幸せを前にして
天 あなたの語るつくりごと、

婆 竹から生まれたややこじゃという、馬鹿馬鹿しい大嘘を
はらわたがちぎれる思いで信じたのです。
それが…鬼ですって…。

天 人の女ならまだしも、鬼ですって。
婆 鬼とややこをこさえるだなんて…。
こんな惨めなことは、他にございませぬ。

鬼 もう来なくてよいですよ。ややこができました。
翁 あ…。

鬼 あなたの子です。人の子です。
この娘は、竹から生まれたということにしません。
そういう不可思議な出自であれば、
身分の高い方のお耳に入ることもある。しっかりと育てなさい。
出来る限り、豊かな家に嫁がせて、幸せにするのです

翁 誰か。誰か。

【13】

翁 仕方がなかったのじゃ。

お前には、死んで欲しくなかったのじゃ。

婆 死んで欲しくなかった…。

死とはなんでございましょう。

あなたにとってこのわしは、女としてのわしの命は
とうの昔に、尽き果てていたというのに。

こんな苦しみを味わうくらいなら、

鬼に殺されていたほうが、よほど、よっぽど幸せでございました。

鬼 婆。

夫を外道に寝盗られた、

あなたの辛さ、口惜しさ、よくわかる。

今は外道の身であるが、

かつては私も一人の女であった、

母であった。

翁と交わり姫を成したるは、決して戯れにあらず。

姫。

どうしてあなたを生んだのか、

私の心を語り聞かせよう。

【14】

医 奥方様。

鬼 はい…。

医 …もつてあと数日ですな。心静かに、ご覚悟ください。

鬼 はい、お世話になりました。

倅 先生。何か手立てはないのですか。何か。

鬼 これ。あれば教えて下さるでしょう。

先生がご覚悟、とおっしゃったのです。

私もあなたも、覚悟しなければなりませんよ。

倅 しかし、

鬼 うろたえるでない。それでも男ですか。下がりなさい。

倅 …はい。

鬼 倅の非礼、どうかお許しください。

医 母を失う運命を知れば、誰しも、心静かにはおられません。

鬼 先生。私は十分に生きました。

死ぬことなど、全く怖くはありません。

しかし、気がかりなのは倅のこと。

あの子も私と同じ、病の気があるのでしょうか。

…いかにも。奥方様と全く同じ。

いや、それ以上にたちの悪いものです。

おそらくは、あと一年も生きられぬでしょう。

そのことばかりが心残りです。

早くに夫を亡くし、一人息子のあの子には、

苦勞ばかりをかけました。

まだまだ生きて幸せにならねばならぬのに…あと一年ですって。

倅はまだ十五ですよ。

先生。やがて病に果てる我が身ですが、

倅の為に、何かできることはないでしょうか。

倅の長命の為ならば、何でもいたします。

医

奥方様。ひとつだけ、御嫡男が病を逃れる手段（すべ）がございます。この病は、人の体にとりつき、人を殺す病。いっそ、人ならざるものに変わり果てれば病を退けることが出来るはず。

鬼

人ならざるもの、とは。

医

人ならざる…鬼、でございます。

鬼

鬼ですって。

医

鬼は、生まれながら鬼にはあらず。

鬼とは、人が、人の生き胆を食らい、外道に堕ちた姿でございます。

奥方様。奥方様の生き胆を御嫡男に食べさせなさい。

鬼

御嫡男を鬼にしますのです。そうすれば人をとり殺す病など、先生…あんな心優しい子を外道にするなど、私にはとても…。

亡き主人にも、冥土で申し開きができません。

医

それこそ正しき親の情。愚かなことを申しました。

私はただただ、知り得る限りのことをお伝えしたまで。

御嫡男が、人として死ぬか、鬼として生きるか。

選ぶのは、あなたでございます。

鬼

もし、お待ちください。

天

寝床から這い出て、かまどの前に立つ。

鍋に水入れ、火を起こし、汁物を作りだした。

鬼

この汁の中に、私の生き肝を。

医

奥方様。お許しを。

鬼

俵に食べさせてください。

やはり、このような穢れ事、行うべきではありません。

鬼

お頼み申します。

鬼 母御前。何をしておられる。

鬼 母御前。もう母の作った汁を食べることもないでしょう、最後にあなたにどうしても、食べさせたいと思ったのです。

鬼 母御前、御身体に障ります。お休みになってください。

鬼 母の最後のわがままです。むこうに行っていないさい。

鬼 男がこんなところに入ってきてはいけませんよ。

鬼 はい…。

鬼 先生。さあ、早く。

鬼 生き胆を取り出す痛みは七転八倒の苦しみ、

鬼 女性（によしょう）に耐えられるものではございません。

鬼 自らの死を前にした、母親の覚悟を侮られるな。

鬼 …わかりました。しばしの、しばしのご辛抱。

鬼 この刃が腹に入れば、すぐに気を失いましょう。

鬼 後のことはお任せください。

鬼 …倅や。身勝手な母を許しておくれ。

鬼 お前には生きていて欲しいのだよ。

鬼 たとえ鬼となろうとも、生き長らえて欲しいのだよ。

鬼 命さえあれば、それが何よりの幸せです。

鬼 御免…。

鬼 倅を生かしたいと思う、母の執念。

鬼 こんな痛みなど、感ぜぬ。感ぜぬ。

鬼 自らの生き肝を取り出し、ぐつぐつ煮えさかる鍋の中に、

鬼 ぼとりぼとり、ぼとりぼとりと放りこむ。

鬼 奥方様…。

鬼 血が。腹から熱い血が。

鬼 必死で押さえながら床へと戻り、倅に悟られぬよう横になる。

医　　すぐに「痛み止め」をお持ちしましょう。

天　　これを倅は喰うだろう。

鬼　　倅は鬼となるだろう。

天　　死なせはしません。

鬼　　あなただけは死なせはしません。

倅　　母御前。いかがなされました。

鬼　　少しばかり、腹が痛むだけです。

倅　　腹が。見て差し上げあげましょう。

鬼　　それには及びません。ささ、倅よ。汁は作っておきました。

冷めぬうちに、早く食べなさい。

倅　　有り難くいただきますよ。

しかし、それより母御前の、痛みを始末して差し上げねば。

倅　　母御前。先生より「痛み止め」を頂いて参りました。

ささ、この椀の中のを、一息に飲んでください。

鬼　　…これは…何を飲ませました。

一体、何を…。

医　　見れば倅の腹からは、滝のように血が滴り落ちている。

倅を生かしたいと思う、母の執念。

母と医師の話を立ち聞きしていた倅、

母が自らの生き胆を、己に喰せようとする企みを悟り、

自らもまた、腹を切り裂き、生き胆を取り出しすりつぶし、

湯をかけそれを「痛み止め」と偽り、母に飲ませたのだった。

倅　　母御前。生んでいただいた御恩返しができぬばかりか、

あなたを外道に落としてしまう親不孝、どうかお許しください。

あなたには生きていて欲しいのです。

たとえ鬼となろうとも、生き長らえて欲しいのです。

命さえあれば、それがなによりの幸せでございます。

お達者で。

御嫡男…。

鬼 私に悔いた。

天 倅を鬼にしてまで生かそうなどと、邪な考えを起こした

鬼 天罰だ。

天 倅を失い、鬼となってしまった。

鬼 先生。倅の、永代供養をお頼み申します。

天 命さえあれば、それが何よりの幸せでございます…。

鬼 あなたのいないこんな世に、幸せなどありません。

天 こうなれば、後の世に頼るしかない。

鬼 倅と同じ、極楽浄土に行きたい

天 と願ったが、

鬼 外道の身。それすらも叶わぬ。

天 鬼が人に戻るには、人の心を持つことだ。

鬼 私は天からの声に耳を傾けた。

天 人と交わり、また、子を生みなさい。

そうすれば人の心をとり返し、やがて体も人へと戻る。

その子が育てば育つほど、お前の鬼の力は衰える。

やがて命の理に従い、時がお前を殺してくれよう。

【15】

姫 生まれたのは…。

天 女の子だった。

鬼 なんですか？ 乳が飲みたいのですか？

天 駄目なのです。鬼の乳を飲めば、あなたも鬼となってしまいます。
人の中で育ち、人になるのです。

翁 誰か。誰か。

鬼 不憫な娘よ。

天 許してください。

鬼 あなたは私が、人として往生するためだけに、生まれてきたのです。
罪深き我が命。

この命ひとつの為に、倅は穢れた所業の果てに死に、
あなたは、愛のない交わりの果てに生まれた。

翁 誰か。誰か。

天 翁に娘を託し、私は静かに、天命を待った。

しかし、あの、まん、まん、満月の夜、

婆 血。血。この血が女の証、人の証なのじゃ。

鬼 これは、まさか…よもや、娘の臭い。

天 娘に、月のものが来たのか。

鬼 よかった。

天 これであなたも、立派にややこを生めるはず。

鬼 ああ。

天 一目、会いたい。

天 会いたい気持ち先走り、

我が身が外道であることも忘れ

月夜の下で、姫の前に姿を現した。

鬼 ああ。この臭い。女の臭い。
命の臭いですね。

天 以来、私は、その血の臭いを頼りに、娘の夢の中に現れた。
鬼 果たせなかった唯一の心残り、
天 この乳を、飲ませようとしていたのです。
鬼 私は鬼です。
天 鬼の乳など飲ませるわけにはいきません。
鬼 が、せめて、せめて夢の中ならばいいだろう。
そう思い、この乳を飲ませようとしていたのです。

【16】

鬼 あなたが育てば育つほど、鬼の力は衰えて
ようやっと、私は死ぬことができる。
しかし、あなたが育てば育つほど、
まだまだ長く生きたいと願ってしまう。

天 命惜しむ心は、やがてさらなる不幸、災いを招くことだろう。

鬼 これでよかったのだ

皆、いつか、この世から去る身。
去らねばならぬ命であるのに、まったく愚かなことだ。
去る覚悟など、自分ひとりではできぬ、できぬ。

時の理、病や怪我や、あるいは、大猿の太刀さばき、
そのようなものに、「去れ」「去れ」と
追いたててもらわねば、

人ですら、鬼ですら

自ら去ることなど、できぬ、できぬ。

それほどに、この世は、素晴らしい。

達者でな。

猿 鬼の首は、語るのをやめた。

帝 姫よ。約束だ。余の元に嫁いでもらおう。

お前の母親も、お前が豊かに暮らすのを、冥土で望んでいるだろう。女としての幸せ、妻としての幸せ、母としての幸せを手に入れよ。

天 幸せ？

姫 そんなもの私には、縁のないものでございます。

天 血塗られた因果の果ての果て、

姫 竹に捨てられた鬼の娘に

天 安らかな暮らしなど待ってはいない。

姫 それでも股の間より、

天 さらにさらさら真っ赤な血。

姫 これこそ、まさしく女の証。

天 彼方の月より、此方を見れば、

姫 人も猿も鬼も無い。

天 命生む運命を背負うた我が身。

姫 いくら呪えど、世迷言。

天 月に帰ろう。

姫 月の導きに囚われた、一人の女へと帰ろう。

天 帝は、私の体を何度も、何度も、抱いた。

やがて、私の真っ赤な血は、股の間より流れるのを止めた。

帝 我が一族に、鬼の血が混ざるとは。

鬼の力を手に入れて、一族の繁栄、間違いなし。

しかし、この帝の妃が、
竹から生まれたというのは、面白く聞こえども
鬼から生まれたというのは、聞こえが悪い。
生まれてくる世継ぎの為にもなるまい。

この物語を知るものは、人でさえ、猿でさえ、皆殺しじゃ。
去れ、去れ。

姫 命の獄舎に繋がれて

月に遠吠えするばかり。

末世は近いぞ。

末世は近いぞ。

【〇〇】

帝 さすがは鬼の血を引く女じゃ。

強い子ばかりを生みおるわい。

子 父上。父上。

寝所にお戻り下され。

帝 安心しろ。

余はもうじき死ぬ。

しかし、お前たちは、鬼の血をひいておる。

子 鬼の血？

帝 栄えよ。栄え続けよ。

姫 またそのような妄言（たわごと）を。

病重く、御身体も弱り、正しい心を失っておられる。

子 父上。そのご気鬱が、いくらか和らぐやと思ひ、

帝 まじない師を連れてまいりました。

帝 まじないだと…。

子 庶民の間で大評判。「猿芸」でございます。

帝 さる…。

子 魔が去る、厄去る、病去る。

子 災い去る去る、猿の舞。

帝 その舞を目にした者からは、

病魔、災厄、それら一切が消え去るのだとか。

帝 さる…。

子 参れ、参れ。参れ、参れ。参れ、参れ。

帝 いらん…いらん…余は、猿が嫌いなのだ…。

子 参りて、舞い入れ。

妹 大きな鼓をかついだ、一人の女がやってきた。

妹 やってきた…。

帝 あ、い、い、いもうと…。

姫 何をおっしゃるやら。

帝 あなたの妹は、とうの昔に、流行り病で御隠れになったのでしよう。

帝 生きておったのか…。

妹 腹にややこを宿したまま、死ぬわけにはまいりません。

帝 ややこだと。あの猿の子か。

妹 あなたの詔を受け、

大猿の一族は皆殺し。

しかし、私は、

猿の姿を捨て去り、追手を逃れたのです。

尻から真つな紅落とし、

人へと戻ったのです。

なんという辱め。

猿の誇りを捨て去らねばならぬとは。

これも全ては、我が子の命を守る為。
人になるという恥辱に耐え、
あの人の忘れ形見を生み、育ててまいったのです。

鬼
そこに現れたのは、
猿か、人か、
あるいは別の何者か。

妹
相勤めます舞い方は、
猿
命の理、乗り越えて、
妹
魂の志によって生まれましたる
猿。

妹
いざ舞いましょう、舞いましょう。
帝
やめろ。やめろ…。

鬼
小刀をとり出し、美しい剣舞を披露した。

帝
ええい、猿めが。
去るまいぞ、去るまいぞ。
猿の舞いなんぞで、去るまいぞ。

鬼
小刀が、宙を舞い、帝の喉笛をかき切った。
血しぶきがあがる。
その彼方から、女が笑う。

妹
キーツキツキツキ。
その小刀、覚えておいででしょうか。
それは、お兄様が私にくださった、たった一つの嫁入り道具。

猿に嫁いだ人の恨み、
夫を殺された妻の恨み
忘れ去られた女の恨み
でございます。

鬼 猿使いは風のように姿を消した。

姫 人の長たる帝が猿に殺されたとあつては一大事。
このことは内々に「無い無い」と始末しよう。

鬼 その猿使いの行方は、誰も知らない。

了

※ 上演を希望する際は、有料・無料に関わらず、
必ず劇団までご連絡いただき、戯曲使用の許諾をお受けください。